

## 明治時代の英語副読本（I）

川戸道昭

明治時代、特にその前半において、英語の副読本は、若者が己の精神を鍛え人格を磨くための重要な拠り所となっていた。ユニオンやナショナルなどのリーダーを使って一通りの英語の基礎知識を得ると、彼らは早速それらの副読本を繙いて、精神の涵養に心を注いでいったのである。例えば、明治10年代末から20年代にかけて学生時代を過ごした上田敏は、当時最も広く世に行われたS・ジョンソンの『ラセラス』について、次のようなことを言っている。

《往年吾邦の人盛に英語を学修したる時、此『羅世刺斯伝』の如きを以て教材に充てたること久しく、今、新日本経営の衝に当れる人士の多くは、当年の学舎に在て存に此書を講じたるものなり。……予は先進の諸氏に比して生るゝこと遙に後れ、旧制の外国教修法に依て学ばさりきと雖、なほ嘗て中学に此書を通したることありき<sup>(1)</sup>。》

このように、S・ジョンソンの『ラセラス』やB・フランクリンの『自叙伝』など、一種の人生指南の書物が英語テキストとして広く全国に流行したというのは、そこにかつての儒学ないしは漢文を習得する際の四書・五経に相当する役割が託されていたということをも物語るものであろう。一方で、英語の副読本はまた、日本の将来を担う若者が新しい西洋の思想を吸収し、新時代の構想を練るための重要な知識の供給源となっていた。彼等は、スマイルズ、マコーレー、H. スペンサーなどの作品を繙いて、西洋の先覚者の知恵に学び、社会のリーダーたるに相応しい知識を獲得していったのである。今に残る夥しい数の英語副読本を総合すると当時の若者を取り巻く文学・思想上の環境が概略見えてくる、といっても決して過言ではないほど、当時それらの書物は、求道心、向学心に燃える若者の精神上的の渇きを満たす一大源泉となっていたものであった。

つまり、明治の英語の教科書、換言するとそれに集約される英語教育は、日本の社会全体の知的水準を支える重要な柱となっていたということができるのである。明治42年（1909年）2月、当時の有力雑誌『太陽』は臨時増刊号として「明治の文芸史」を特集しているが、その「外国文学の紹介」の項を締め括る結論は、「当時〔明治前・中期〕の英学生は、大部分皆な文学書に依って修業した。これは来るべき時代の文運には少からぬ影響あることであらう」<sup>(2)</sup> というものであった。学生の勉強した英語の学習内容が、次代の文運を左右するというのだから、凄い影響力である。たかが一教科の学習に、一国の文章の将来がかかるといえるなど、今の世の中では到底考えられないことだが、逆に言えば、そういう時代状況であったからこそ、当時の学生が使用した副読本の起源と流行、さらにはその影響に

関して、詳しく検証してみる意義も深いというものだろう。それは、すなわち、一介の書生から身を起こして「新日本の経営の衝」に当たるに至った「人士」たちの精神的拠り所を検証することを意味する。同時に、彼等の精神を育んだ明治の学校教育、そしてさらには、彼等にそれらの副読本を供給した、丸善、三省堂、有斐閣、等、今にその名をとどめる有力出版社の初期の出版活動に光を当てることにもなるだろう。

## I 英語副読本の起源

明治期の英語教科書は、大別すると、舶来本と和製本の二種に分類される。後者はさらに、原書をそのまま日本で印刷し直した翻刻本と、原資料を基に日本で独自に編集・刊行した邦刊本に分けることができる。そしてその、舶来本、翻刻本、邦刊本の三種を、それらが使用された時期と関連づけて、

- 第一期 舶載本時代 明治初年から十八年頃まで
- 第二期 翻刻本時代 明治十八年から三十年まで
- 第三期 邦刊本時代 明治三十年以降

と分けるのが、池田哲郎氏が『日本の英学 100 年』の中で行っている、明治期の英語教科書の分類法である<sup>(3)</sup>。池田氏の言う「英語教科書」には、数学、理科、地歴、その他の英文で書かれた教科書全体が含まれている。それに対し、筆者がここで取りあげ用としているのは、もっと範囲を限定した、英語の学習を主たる目的とした教科書、その中でも英語の読解力を養成することに主眼を置いた訳読用の補助教材である。そうした英語教材を総称する名称として、以下本論では「英語副読本」という言葉を用いることにする。「ナショナル」や「スイントン」などの「読本」に対して「副読本」というほどの意味で、その実体は、欧米作家の作品を主とした講読用の英語テキストを指すものと理解していただきたい。

さてその英語副読本であるが、池田氏の言う英語教科書一般の分類と比べて、大きく異なっているのは、第二期の「翻刻本時代」である。英語副読本には翻刻本というものがあまり見られない。当時最も流行したマコーレーの作品を例にとりて考えてみても、明治10年刊行の最初のテキストからして、既に、編者が原書の中から日本の学生に適した一部の作品を抜き取って印刷・製本するという<sup>(4)</sup>、上記の分類法でいえば「翻刻本」よりはむしろ「邦刊本」に分類した方が適当と考えられるものである。年代区分の上から見ても、第二期の上限は上の分類より8年遡った明治10年とするのが妥当と思われる。それは、この年、東京大学からマコーレーの『ワーレン・ヘイスチングス』など本邦最初の副読本3冊が刊行されたことに基づくものである<sup>(5)</sup>。東京大学からは、以後、明治17年までの8年間に約14種の英語副読本が刊行されるが、明治初期の英語教科書の動向を決定したのは、福沢諭吉の将来した舶載本であったとすれば、明治の英語副読本の大勢を決定したのは、

実にこの 14、5 冊の東京大学刊行の副読本であった。それほど後の英語テキストの出版に及ぼした影響には大きなものがあった。以上のことを総合して、英語副読本の刊行の歴史について、新たな時代区分を作成してみると、大体次のようになるかと思う。

第一期	舶来本期	明治初年から十年代まで
第二期	東京大学刊行本期	明治十年から十七年まで
第三期	書店刊行本期	明治十七年以降

「ウイルソン・リーダー」などの読本類とは違って、副読本の場合には、第一期の舶来本は英語より西洋の初学を学ぶための教科書という性格が強く<sup>(6)</sup>、英語副読本の歴史全体から見るとこの時期は日本に英語副読本という概念が確立する以前の黎明期と位置づけるのが適当ではないかと思う。それに対し、第二期の東京大学のテキストは、同じように副読本としての性格は曖昧であるが、一冊一冊の出版意義は大きく、それ以降の英語テキストの傾向をほぼ決定したといえるほど重要な意味をもつものである。様々な事情を考慮すると、この時期に刊行された英語教科書は、「副読本」というより、訳読用の「主要教材」として出版されたと考える方が当たっているのかも知れない。しかし、当初の出版にとは何であったにしても、これらの教科書は、東京大学から大学予備門、さらに学外の専門学校、私立英語学校へと使用範囲が広げられていくにつれ、次第に英語学習用の副教材としての性格を帯び、かつその性格を強めていった。そして最終的には、それが基になって書店刊行の英語副読本が誕生するという経緯に照らしてみると、わが国の英語副読本の起源を論じる際に、まず第一に取りあげなくてはならない重要な教科書だと思う。このような観点に立って、以下本章では、これらの教科書が東京大学において編集・上梓され、やがて学校の内外に流行し、そこから本邦初の書店刊行英語副読本が作られていくまでの過程を詳しく検証していくことにする。

### (1) 東京大学刊行英語テキスト

教科書を舶来本に頼っていた第一期の時代は、原則的に学校が同一の原書テキストを購入して、生徒に貸与するという方法が採られていた。各地の官立英語学校の蔵書目録をみると、英語の読本や文典などに時に数十冊にも及ぶ重複する蔵書が見られるというのはそうした事情によるものである<sup>(7)</sup>。しかし、英語を学ぶ生徒の数が限られていた時代はそれでも支障はなかったが、明治 10 年近くになって学校間の統廃合が進み、東京大学やその予備門のように学生総数が数百にも達する規模の学校が出現するに至ると、使用する教科書の全てを輸入の書物に頼るという方法には自ずから限界が生じるようになった。東京大学開設当初の明治 10 年度の学生数を調べてみると、法理文の三学部だけでも、予科、本科を合わせた総数は 266 名、また、開成学校の予科と東京英語学校が合併してできた大学予備門になると、その数はなんと 614 名にも及んでいる<sup>(8)</sup>。これらの学生に充分行きわたる教

科書を揃えるには、当時の原書の輸入事情に鑑みて、大変な困難が伴ったことが想像される。特に、同一書の数に限界のある副読本の場合は、授業に支障を来さないだけの本を揃えることなどまず不可能に近かったと考えていいだろう。

明治10年、法理文医の4学部からなる総合大学、東京大学が誕生するのと機を同じくして、日本における英語副読本の嚆矢ともいえるテキスト3冊が刊行されたという背景にはこのような事情が大きく与かっていたものと考えられる。その後も明治11年に6冊、12年に2冊、15、16、17年に各1冊と継続的に刊行が続いているところをみても、これが個人の思い付きから始まった私的な印行ではなく、大学当局も積極的に関与した計画的な事業であったと推測されるのである（東京大学刊行英語副読本の明細は本論末尾一覧表参照）。

それではこれら一連の副読本は一体誰の手でどのような学生を対象に発刊されたのかということだが、各本の中扉に、いずれも、「The Department of Literature of Tokio Daigaku」の文字が見えること、また、明治10年刊行の『ミルトン』の表紙見返しに、「法理文三学部印行」と押さした朱印があることなどから判断すると、恐らくこれは文学部を中心に法理学部が協力して成った教科書ではなかったろうか。実際、この推測を裏付けるかのように、当時の教員が毎年文部大臣に報告していた「申報」には、例えば、逍遙などに英文学を講じたことで知られる、例のウィリアム・ホートンが、明治10年に理学部の2年生に「東京出版 マコーレー氏所著ノワルレン ベスチングヲ用本トシ」たという記述が見える。また、当時、英文学、論理学、哲学の教授であった外山正一の「申報」には、明治11年、文学部1年生に「マコーレー氏 ミルトン」、「チンデル氏 ベルファースト演説」、「スペンサル氏 代議政体論」等を講じたとある。同様に、12年以降の各教官の講義内容と東京大学出版の英語テキストの関連を調べてみると、ホートンの講義が10年刊行の『ワーレン・ヘイスティング』と11年刊行の『ベニスの商人』の2書に関係するだけであるのに対して、外山の場合は14冊中、実に10書にも関連が及んでいる（末尾一覧表参照）。他に、これら一連のテキストと関係した教官を調べてみても、15年に帰国したホートンと入れ替えに「英文学羅匈語講師」となった神田乃武がR・W・エマソンの作品など2、3のテキストと関係する<sup>(11)</sup>ぐらいでそれ以外には見当たらないことから、これらの副読本出版の中心にはやはり外山がいたと考えるのが自然であろう。

実際に、外山からこれらのテキストを使って講義を授かった学生の証言も残されている。明治11年、すなわち外山がマコーレーの『ミルトン』などを講じた年に、文学部1年に在籍した学生には、坪内雄蔵（逍遙）や高田早苗（半峰）など、後に東京専門学校の設立や授業に深く関わった人達がいたが、その中の一人高田早苗は当時の外山の授業を振り返って次のように言っている。

《私は教授としては外山先生のお陰を一番多く蒙った。外山先生は『ウォーレン・ヘイスティングス伝』『ロード・クライヴ伝』又は『ミルトン伝』といふが如きマコーレーの論文を教科書として、今日でいふ英語の訳読を教へてくれたのであって、大学の教授と

しては、専ら論理学、心理学等を受け持って居られた。そして私が先生のお陰を蒙ったといふのは、専ら訳読方面であったのである<sup>(12)</sup>。》

これらのテキストのことで、我々が真に注目しなければならないのは、それが以後の英語テキストの傾向をほぼ大筋において決定するほどの影響力をもったという点だと思う。明治 10 年代から 20 年代にかけて、全国の諸学校が先を競うようにして採用した英語副読本は、その普及の経路を遡ると、ほとんどが東京大学およびその予備門のテキストに帰着する。それほど、法の統制下にある学制上の事柄はもちろん、各校の選択に委ねられていたはずの教科書の選定に至るまで、両校は絶大な影響力を誇っていたのである。

そのことを端的に物語る資料として、東京専門学校の開設初年度、つまり明治 15 (1882) 年度の『年報』を挙げることができる<sup>(13)</sup>。そこに記録されている、「英学科」のテキスト一覧を見れば、それがいかに東京大学の講義内容を色濃く反映したものであるか、一目瞭然であろう。すなわち、マコーレーの諸作にはじまって、ティンダルの『ベルファースト・アドレス』、アンダーウッドの『大家文集』、スプレイグの『英国大家文集』に至るまで、その大半は東京大学の教場で、外山正一やホートンらによって講じられたテキストの踏襲であった。

しかし、同じテキストを使用するのはいいとして、問題は東京専門学校ではそれらのテキストをどのように調達していたのかということである。明治 15、6 年に刊行されていた英語の副読本といえば、東京大学のものを措いて他にはない。原書を求めたか、東京大学のテキストを都合してもらったか、そのいずれかであったと思われるが、原書の数には限りがあることから恐らく後者であったと想像される。あるいは、事情はむしろその反対で、開設早々相当の学生数が見込まれた東京専門学校では<sup>(14)</sup>、英語の副読本に関してはとにかく入手可能なものにと考えた結果、東京大学出版のテキストを選択せざるをえないということになっていったのかも知れない。ともあれ、東京大学刊行の英語副読本は学内向けテキストの域を越えて、広く他校の英学生の間にも浸透していく状況にあった。明治 17 年 2 月丸善から出版された W・D・コックスの『英文法』(3 版)の裏表紙を見ると、そこにはマコーレーの『ミルトン』を初めとする東京大学出版の英語副読本 11 冊の宣伝が掲載されており、それぞれに 16 銭、30 銭といった値段まで記入されている<sup>(15)</sup>。このことから見ても、これら一連のテキストは、単に東京大学の学生ばかりか、広く英語を学ぶ学生一般が容易に手にし得るテキストとなっていたことが分かるのである。

やがてそれは、高まりゆく英学熱を背景に教科書の翻刻・出版に乗り出した一般書店の手を経て、全国にその読者を広げていく。マコーレーの『ワーレン・ヘイスティングス』が初めて日進堂、有斐閣の二書店から刊行されたのは、明治 17 年 8 月のことであったが、そのわが国の副読本出版史上記念すべき本の奥付けには「東京大学法理文三学部 原刊」という文字が刻まれており、それが明治 10 年刊行の東京大学版に依拠していたという動かしがたい証拠となっている<sup>(16)</sup>。このように、東京大学刊行の英語テキストは、明治 17 年以

降急速に市場に出回っていく書店刊行の英語テキストに、内容・形式の両面から一つの範を提供する一方で、明治 20 年代になっても、その原本自体廃れることなく広く一般に読み継がれていった。当時の英語学習雑誌の質疑応答欄などに、「Macaulay's *Hallam's Constitutional History* (東京大学出版) 第十三ページ」<sup>(17)</sup>というように、わざわざ東京大学のテキストと明記した上で質問がなされているところなどを見ても、いかにそれが学生に馴染みの深いテキストとなっていたか推察できるのである。

## (2) 書店刊行の英語副読本

第二期の東京大学刊行本の時代は明治 17 年 5 月の『ラセラス』の出版をもって終わる。上述の通り、出版の終了がその教科書の使用の終了を意味するものではないから、これにはあくまで出版時点を中心にした年代区分という但し書きが付くことは言うまでもない。東京大学の最後の教科書の出版から、遅れること 2 か月余りを経た明治 17 年 7 月、マコーレーの『クライヴ』が東京同盟出版書肆<sup>(18)</sup>から、次いで 8 月、同じく『ワーレン・ヘイスティングス』が前記の日進堂、有斐閣の二書店<sup>(19)</sup>から刊行される。また、同じ 17 年、丸善からは、H. スペンサーの『代議政体論』<sup>(20)</sup>が世に送られる。いずれも東京大学のテキストに採用されている作品であり、この明治 17 年という年が、英語副読本刊行の主体が東京大学から一般書店に移動する転換の年であったことが確認されるのである。

それ以降、明治 10 年代に書店から刊行された英語副読本の総数は、現在筆者が確認しているだけで 18 点、その内の実に 14 点までが東京大学から出版されたテキストの内容を受け継いだものであった。洋書の購入が今ほど容易ではない時代のことだけに、ひとたびそれが本邦の出版書店から刊行されたとなると、全国への浸透振りは我々の想像を越えるものがあつた。その多くは、5 版、10 版と版を重ねていく。例えば 18 年発行の六合館の『クライヴ』などはほぼ毎年のように版を改めて、31 年には 14 版に達している<sup>(21)</sup>。マコーレーやジョンソンの作品が流行したというのも、一つには、それが全国の書店で容易に購入しうるテキストであったという当時の書籍の流通事情を考慮に入れる必要があるだろう。

この時代の英語テキストの出版書店に目を向けると、一つの大きな特徴があることに気がつく。それは、そのような英語教科書の大半が東京同盟出版書肆と六合館という 2 つの出版書店の連合体名で発行されているということである。前記の明治 17 年刊行の『ワーレン・ヘイスティングス』の場合も、出版人こそ日進堂、有斐閣の店主名となつてはいるが、出版人の直ぐ横には東京同盟出版書肆として構成会員 6 店<sup>(22)</sup>の名が併記されている(日進堂、有斐閣の他、三省堂、開新堂といった書店の名が見える)。一方、六合館の方も、その名の通り会員は 6 書屋<sup>(23)</sup>、慶雲堂(伊藤徳太郎)、瑞穂屋(清水卯三郎)などが主たる構成員で、丸屋(丸家善七)も明治 15 年頃まではその一員として名を連ねていた<sup>(24)</sup>。これらのグループ名が使用されるのは、読本や副読本等、英文の教科書、あるいはごく例外的にその翻訳の場合に限られ、双方のグループには、従つて、'Tokio Publishing Company'、'Rikugo-kwan' という欧文名も存在した。明治 20 年代に入ると、グループは解体されて個々

の書店がそれぞれの書店名で教科書の出版を手掛けていくようになることから、この二つの書店連合というのは、明治 10 年代から 20 年代初頭にかけての英語教科書出版草創期の一つの過渡的特徴とみることができるのである。

明治 17 年以降 19 年までに発行された英語副読本 18 点の書店別区分を調べて見ると、東京同盟出版書肆に属するものが 7 冊、六合館 4 冊、丸善 2 冊、その他書店が 5 冊となっており、刊行点数、あるいは出版時期の上から見る限り、英語副読本発刊の先駆けの荣誉は東京同盟出版書肆に与えられるべきものと判断される（本論末尾一覧表参照）。明治 20 年代に入ると、その構成メンバーであった、三省堂、開新堂、有斐閣などが、英語教科書の出版・販売書店として一頭地を抜く存在になっていくのも、こうした経験と実績によるところが大きかったものと思われる。

しかし、副読本の刊行に関しては東京同盟出版書肆にやや遅れを取りはしたけれど、一方の六合館の方も、一般の英語教科書（読本や文法書）の翻刻にかけては決して東京同盟出版書肆に劣らない豊富な経験と実績を有していた。日本における英語教科書翻刻の歴史は、後に六合館の一員として活躍する東京京橋の書店主、伊藤徳太郎が単独で『ウイルソン第一読本』を翻刻・上梓したことに始まる<sup>(25)</sup>。それは東京同盟出版書肆が最初の英語副読本を手掛ける 5 年前の明治 12 年のことであったが、当初伊藤個人の名義で出版されたその『ウイルソン第一読本』は、過当競争を避ける目的からか、すぐ 1 年後の 13 年には、丸屋を含む前記 6 書店の名の下に翻刻出版されることになった<sup>(26)</sup>。つまり、日本で最初の英語教科書が翻刻された約 1 年後には、早くも書店の連合体による英語教科書の出版・販売が開始されたのである<sup>(27)</sup>。しかし、この時点では未だ六合館なる名前は存在せず、本の表紙と扉に記された'Tokio Bookselling Company' が唯一、連合書店名となっている。その欧文の連合体名がいつの時点で六合館に改められるのか、その時期を特定するのは難しい。その理由は、同じ『ウイルソン・リーダー』でも、同一の組版が 2 度、3 度と刷り直されていった際に、奥付けの刊行年月はそのままにして、出版社名のみ六合館と改められた本が少なからず存在するためである。例えば、明治 13 年 10 月「翻刻御届」の『ウイルソンの第一読本』は本来'Tokio Bookselling Company' の名で発行されたものであるが、木村毅氏の『丸善外史』によれば、それ以外に'Rikugokuwan' と書かれた版もあるという報告がある。筆者の手許にもたまたまその六合館版があつて、精査した結果、実はそれは 18 年以降の後版であることが判った。その決め手となったのは、表紙裏に記載された同書店連合発行の書籍の宣伝で、そこには明治 18 年に発行されたマコーレーの『クライヴ』と『ワーレン・ヘイスティング』の 2 書の名が掲載され、25 銭の値段まで記入してある。これは、明らかに、奥付けの刊行年月を変えずに表紙その他の書店名のみを入れ替えた明治 18 年以降の新版と考えられるもので、やはり最初の版は'Tokio Bookselling Company' の方であったと見るべきであろう。'Tokio Bookselling Company' の名前が使われるのは 17 年の『ユニオン第一読本』あたりが最後で、その少し前には表紙が'Tokio Bookselling Company' とあるのに奥付けには六合館の朱印が伴う中間的なものもある。'Tokio Bookselling

Company' が使用されなくなる 17 年頃というのは、ちょうど東京同盟出版書肆が英語副読本の刊行へと乗り出す時期と重なっており、'Tokio Bookselling Company' が 'Rikugokuwan'（六合館）へと統一されていく背景には、あるいは新興の東京同盟出版書肆への対抗意識が働いていたと見ることもできるかも知れない。

いずれにしても、わが国で最初に英語リーダーの翻刻出版を本格的に手掛けることになったのは'Tokio Bookselling Company' であり（それ以前の書店刊行のものとしては前記伊藤徳太郎の一書あるのみ）、同所からはウイルソンの第一、第二、第三リーダーを初めとする 10 乃至は 20 種前後、つまり明治 17 年以前に刊行された英文教科書の大部分が翻刻出版されている。一種の独占出版・販売のようなものだったと思われるが、それに加わっていない書店からすれば、この 6 書店による共同出版・販売事業というのは大変気になるものであったに違いない。何とかそれに対抗できるような企画はないかと機会を窺っていた書店も少なくなかったろう。明治 17、8 年の英語熱の高まりを機に、そのような書店が寄り集まって手掛けていったのが英語副読本の刊行である。東京同盟出版書肆の名の下に、まずは東京大学の刊本をモデルとしたマコーレーの 2 書を発表、つづいて『ラセラス』、『ミルトン』、『フレデリック大王』と矢継ぎ早に人気の教科書を世に送り出していった。一方、先輩格の'Tokio Bookselling Company' の方も、思わぬライヴァルの出現にただ手をこまねいて見守っていたわけではない。従来分かりにくかった連合体名も六合館に統一して、これに対抗。そこにはいろいろな意味での競争原理が働いて、結果的に日本の英語テキストの流通体制を急速に整備することへと繋がっていった。明治の英語教科書刊行の歴史は、このライヴァル関係にあった 2 つの書店の連合体、六合館と東京同盟出版書肆の活躍を視野に入れずして、語ることはできないのである。

#### 【東京大学出版テキスト一覧】

- 明治 10 年 Macaulay, Thomas Babington  
*Warren Hastings: An Essay* (From Modern British Essayists)  
The Dept. of Literature of Tokio Daigaku, 2537 [1877], 131p.
- 同 Macaulay, Thomas Babington  
*Milton: An Essay* (From Modern British Essayists)  
The Dept. of Literature of Tokio Daigaku, 2537[1877], 59p.  
(巻頭見返しに「東京大学法理文三学部印行」の朱印がある。)
- 同 Spencer, Herbert  
*Philosophy of Style: An Essay.*  
The Dept. of Literature of Tokio Daigaku, 2537[1877], 53p.
- 明治 11 年 De Quincey, Thomas  
*Charles Lamb, Goethe: Essays.*  
The Dept. of Literature in Tokio Daigaku, 2538[1878], 80p.

- 同 Shakespeare, William  
*The Merchant of Venice*. Ed. by W. G. Clark and W. A. Wright.  
The Dept. of Literature in Tokio Daigaku, 2538[1878], 77p.
- 同 Spencer, Herbert  
*Over-legislation: An Essay*.  
The Dept. of Literature of Tokio Daigaku, 2538[1878], 57p.
- 同 Spencer, Herbert  
*Representative Government: An Essay*.  
The Dept. of Literature of Tokio Daigaku, 2538[1878], 47p.
- 同 Tyndal, John  
*The Belfast Address*.  
The Dept. of Literature of Tokio Daigaku, 2538[1878]
- 同 Tyndal, John  
*The Constitution of Nature 1865: Scientific Materialism 1868*  
(From Fragments of Science).  
The Dept. of Literature of Tokio Daigaku, 2538[1878], 37p.
- 明治12年 Macaulay, Thomas Babington  
Hallam's Constitutional History: An Essay.  
The Dept. of Literature of Tokio Daigaku, 2539[1879], 128p.
- 同 Macaulay, Thomas Babington  
Sir Jhon Malcolm's Life of Lord Clive. An Essay (Reprinted from  
Modern British Essayists).  
The Dept. of Literature in Tokio Daigaku, 2539[1879], 104p.
- 明治15年 Emerson, Ralph Waldo  
Culture and Behavior: Essays.  
The Dept. of Literature, Tokio Daigaku, 2542[1882], 76p.  
(「東京大学印行」 「明治十五年五月十三日」の印あり)
- 明治16年 Emerson, Ralph Waldo  
Civilization, Art, Eloquence and Books: Essays.  
The Dept. of Literature, Tokio Daigaku, 2543[1883], 98p.  
(「東京大学印行」 「明治十六年一月十日出版届」の印あり)
- 明治17年 Johnson, Samuel  
The History of Rasselas, Prince of Abyssinia.  
The Dept. of Literature, Tokio Daigaku, 2544[1884], 123p.  
(巻頭見返しに「東京大学印行」、巻末見返しに「明治十七年五月廿日出版  
届」 「定価金貳拾五銭」の印あり)

上記のうち、外山正一が東京大学で使用したテキストは以下の通り(『東京大学報』による)。

明治11年	文学部1年	
	マコーレー	「ミルトン」
	チンデル	「ベルファースト演説」
	スペンサル	「代議政体論」
明治12年	文学部2年	
	ドクインシー	「チャールズ・ラム」
	マコーレー	「ハラム氏憲法史」
	スペンサル	「フィロソフィ・オフ・スタイル、文体論」
	チンデル	「ゼ・コンスチチューション・オフ・ネーチャア」
明治15年	理学部2年	
	エマーソン	「カルチャーア及ヒビヘービアー」
	哲学科2年	
	エマーソン	「シビリゼーション、アート、エロクエンス、ブックス」

#### 【明治10年代英語副読本（出版社別・刊行年次順）一覧】

[丸善]

明治16年	Cox, William Douglas	Glimpses of English Literature for Japanese Students. 5 vols. Maruya, 1883.
明治17年	Spencer, Herbert	Representative Government; an Essay. Z. P. Maruya, 1884. 47p.
明治18年	Smiles, Samuel	Self-help, etc. Z. P. Maruya, 1885, 442p.
刊年不明	De Quincey, Thomas	Confessions of an English Opium-eater. Tokio, Z. P. Maruya [n. d.] 149p.

[東京同盟出版書肆]

- 明治17年 Macaulay, Thomas Babington  
Sir John Malcolm's Life of Lord Clive. An Essay.  
Tokio Publishing Co., 1885, 104p.  
(筆者は初版は未見だが、18年の再版の奥付に「明治十七年六月十二日出  
版御届同年七月出版／同十八年四月十七日再版御届同日分版御届／同年五  
月一日出版発兌」とある。)
- 同 Macaulay, Thomas Babington  
Warren Hastings. T. O-hira & O. Yeghusa, 1884, 135p.  
(奥付に「東京大学法理文三学部 原刊／明治十七年六月十二日翻刻  
御届／同年八月出版」とある。「出版人」は「大平俊章 [日進堂] /  
江草斧太郎 [有斐閣]」。それに続いて「同盟出版書肆」の名の下に6  
書店名と住所が連記されている。)
- 明治18年 Johnson, Samuel  
The History of Rasselas, Prince of Abyssinia.  
Booksellers Associated, 1885, 123p.  
(「出版人」は'Tokio Publishing Company'と同じ6名で、「同盟出版書肆」の  
記載もある。)
- 同 Johnson, Samuel  
The History of Rasselas, Prince of Abyssinia.  
Tokio Publishing Co., 1885, 123p.
- 同 Macaulay, Thomas Babington  
Milton: an Essay. Tokio Publishing Co., 1885, 59p.
- 同 Macaulay, Thomas Babington  
Frederic the Great. Tokio Publishing Co., 1885, 93p.
- 明治19年 Macaulay, Thomas Babington  
Annotation to Macaulay's Frederic the Great.  
Tokyo Publishing Co., 1886, 27p.

[六合館]

- 明治18年 Macaulay, Thomas Babington  
Sir John Malcolm's Life of Lord Clive. An Essay.  
Rikugokuwan, 1885, 104p.
- 同 Macaulay, Thomas Babington

Warren Hastings. Rikugokuwan, 1885, 126p.

同 Spencer, Herbert

Representative Government, an Essay.

明治19年 Johnson, Samuel

The History of Rasselas, Prince of Abyssinia.

Rikugokuwan, 1886, 135p.

[その他出版書店]

明治18年 Spencer, Herbert

Over-legislation, an Essay. I. Kanazawa, 1885, 51p.

同 Spencer, Herbert

Over-legislation, an Essay. I. Kanazawa, 1885, 51p.

明治19年 Lamb, Charles & Mary

Tales from Shakespeare. S. Sawaya, 1886, 100p.

同 Macaulay, Thomas Babington

Hallam's Constitutional History. Tokio Nishimura & Co., 1886, 115p. 同

Macaulay, Thomas Babington

Notes on Warren Hastings for Japanese Students.

Kyoyekishosha, 1886, 121p.

[注]

- (1) 上田敏「序詞」(『王／子 羅世刺斯伝』芝野六助訳 大日本図書株式会社、明治38 [1905]年) 4-5頁。
- (2) 『明治史第七編 文芸史』(『太陽』臨時増刊15巻3号) 博文館、明治42年(1909年)、61頁。
- (3) 『日本の英学100年 明治編』研究社出版、1968年、362頁。
- (4) 例えば、その内の『ワーレン・ヘイスティングス』と『ミルトン』の扉を見ると、'FROM MODERN BRITISH ESSAISTS'という文字が見え、そういう標題の随筆集か何かの抜粋であったことを窺わせる。
- (5) 明治10年刊行の3書に関しては本文末尾 [東京大学出版テキスト一覧] 参照。
- (6) 例えば、明治初年に慶応義塾で使用されていた教科書と10年代の英語副読本を比べてみても、共通するのはパーレーの万国史とH・スペンサーの作品くらいで、あまり緊密な関係は認められない。『慶応義塾五十年史』慶応義塾、明治40年(1907年)、123-128頁、および『日本の英学100年 明治編』362-64頁参照。

- 7) 池田哲郎『日本英学風土記』篠崎書林、1979年、172頁他。
- 8) 『東京大学法理文学部第五年報 自明治九年九月 至同十年八月』東京大学、明治10年(1877)年、16頁。
- 9) 『東京大学法理文学部第六年報』、78-80頁。
- 10) 『東京大学法理文学部第七年報 自明治十一年九月 至同十二年八月』東京大学、明治12年(1877)年、63-67頁。
- 11) 『東京大学第三年報 起明治十五年九月 止同十六年十二月』東京大学、明治17年(1884年)、258-259頁。神田は理学部1年と法文学部1年の授業に「エマソン氏著述書(東京大学出版)ヲ授」けたと記している。その他「メルチャント、オフ、ヴェニス」を教授したとあるが、使ったテキストが東京大学版であったか否かは不明。エマソンの東京大学版テキストは本文末尾「一覧表」参照。
- 12) 高田早苗述『半峰昔ばなし』早稲田大学出版部、昭和2年、37頁。
- 13) 『東京専門学校年報 明治十五年度』早稲田大学大学史編集所、1982年、8頁。同頁に綴じ込まれた科目表の内「英学科」科目表参照。
- 14) 前掲書、24頁には15年10月から16年8月までの東京専門学校の生徒の増減が一覧表にしてまとめてあるが、それによると15年10月の「英学科」生徒は60名、16年8月には137名と、わずか10か月で生徒数が倍以上に膨れ上がったことが分かる。
- 15) W.D.Cox, *A Grammar of the English Language for Japanese Students, Part I, II*, Z.P.Maruya & Company, 1880. 同書下巻の3版が出版されたのは17年2月、また17年7月には上巻の4版が出版されているが、双方ともに裏表紙には東京大学出版のテキスト11冊の宣伝が載っている。本文末尾「一覧表」の内、そこに掲載されていないのは『ワーレン・ヘイスティングス』、『ヴェニスの商人』、『文化と(Culture and Behavior)』、『ラセラス』の4書で、その他「一覧表」にない書の名が一つ掲載されている。それは「*Addresses on the Claim of Scientific Education by Justus Von Y.S. Liebig and others*」という作品で、定価は30銭とある。
- 16) 本書に関しては、本文末尾「明治10年代英語副読本 出版社別、刊行年次順、一覧」参照。なお同テキストは明治23年(1890年)に重版(版数記載なし)が出ており、その奥付けにも「東京大学法理文三学部 原刊」という文字が見える。
- 17) 磯辺弥一郎編『国民英学新誌』第14号、三省堂、明治22年(1889年)7月、(442)頁。同誌には一般読者を対象とした「NOTES AND QUERIES」と題する質疑応答欄があり、ここに掲げたのはその中の東京の学生から寄せられた質問の一部。
- 18) 本文末尾の「明治10年代英語副読本・・・一覧」参照。

- 19) 同「一覧」参照。
- 20) 同「一覧」参照。
- 21) 明治31年(1898年)3月、14版。初版と比べて異なるのは、奥付けの朱印が無くなるのと、発行者が渡辺兵吉1人の名前になっているという2点。
- 22) 6書店とは、日進堂、有斐閣、十字屋(神田区錦町)、桃林堂、開進堂、三省堂の6店。その他に「大売捌」として、十字屋(京橋区銀座)、文明堂、梅原亀七の3店が掲載されている。18年9月出版の『印度征略史』(末廣重恭訳、東京同盟出版書肆)の巻末を見ると、「東京同盟出版書肆」として、それまで「大売捌」書店であった十字屋(京橋区銀座)、文明堂の2店が加わって、合計8店の名前が掲げられている。さらに、同書店連盟の変遷を辿れば、24年11月の段階で桃林堂の名が消え(24年11月訂正再版『須因／頓氏 大文典講義録 第四巻』工藤精一講述、開進堂、奥付け参照)、27年3月になると(同年同月発行『今様／長歌 湖上の美人』塩井正男訳、開進堂、巻末広告参照)、「東京同盟書肆」の名称は消えそれまでの同盟書店すべてが「東京市大売捌所」として他の書店と共に一括掲載されている。個々の本屋が力をつけてきたために、共同出版・販売のメリットがうすれ、同連盟は解散することになったものと思われる。当書店連合の出版形式としては、連盟に加わる書店の全部、ないしは一部が共同して出版に当たり、加入各店がその販売に協力するという形が取られていた。ここに挙げた英文テキストの『ワーレン・ヘイスティングス』は、日進堂、有斐閣の2店、同じく『クライヴ伝』『ラセラス』は同盟結成時の6店全て、末廣重恭訳の『印度征略史』は、日進堂、桃林堂、開進堂、三省堂の4店がそれぞれ出版人となっている。20年代に入ると、書店連盟の活動は共同の出版よりはむしろ販売の方にウエイトが移され、名称の方も、従って、「出版」の2文字を抜いた「東京同盟書肆」が一般的になる。
- 23) 筆者が現在確認しているもので、この6書店の名前で出版されたものとしては明治13年7月15日「翻刻御届」のウェブスターの **Elementary Spelling Book** が一番古い。そこに書かれている6店は、丸屋(丸屋善七)、島屋(塩島一介)、瑞穂屋(清水卯三郎)、土屋(松井忠兵衛)、慶雲堂(伊藤徳太郎)、大和屋(西宮松之助)の6店である。
- 24) 丸屋は明治15年6月合巻御届のパーレーの **Universal History** の段階では前期6店と共に「翻刻人」として名を連ねているが、同年12月「出版御届」のカッケンボスの **First Book in Grammar** あたりから、出版人から抜けて、1店だけ「売捌所」として別項に名前があげられるようになる。代わって **Bookselling Co.** に名を連ねるのは屋号なしの岡本直吉。以後この岡本直吉を加えた6書店の体制が1、2年続くが、同書店連合が「六合館」として、初の英語副読本『クライヴ伝』と『ワーレン・ヘイスティングス』を出版する18年4月になると、岡本直吉の名は消え、代わって大阪の梅原忠蔵が加わり「六合館分館」を名乗る(木村毅氏の『丸善外史』)

[丸善社史編集委員会、1969年] 118頁には梅原亀七とあるが、亀七は同じ大阪の書店ではあるが、同盟出版書肆の方の「大売捌」書店であり、忠蔵の誤り)。

- 25) 本書は表紙に'Tokio: / Reprinted by T.T.Itoo. / 12th year of Meiji.' と書かれているだけで、発行月の記載はない。但し巻末の、フライリーフに朱印で「明治十一年十二月五日／翻刻御届定価金四十銭／翻刻出版人東京平民伊藤徳太郎・・・」の文字が捺されている。木村毅氏も言う通り、これが書店刊行のリーダーの中で最も古いものと考えられる(木村『丸善外史』116-117頁参照)。
- 26) 伊藤徳太郎の『ウイルソン第一読本』にも'Tokio Bookselling Co.' のそれにも発行月の記載がないので「翻刻御届」の年月を比べると前者は11年12月、後者は13年10月で、双方の届出の時期には1年11か月の開きがある。
- 27) 実際には前記ウェブスターの *Elementary Spelling Book* の方が、出版時期としてはこれより早く、伊藤の『ウイルソン第一読本』の届出から1年7か月後にはTokio Bookselling Co. 最初の英語教科書の翻刻届出がなされたことになる。
- 28) 木村 前掲書、117-8頁。
- 29) *The First Reader of the School and Family Series*, ed. by Marcius Willson. Rikugokuwan, 1880. 本書の表紙と扉には'Tokio./ Rikugokwan. / Publishers.' とある。奥付には「明治十三年十月七日翻刻御届」と記載があるだけで、発行年月日は書かれていない。裏表紙に、'Approved School Books/ Tokio: / Rikugokuwan.'としてマコーレーの2書を含む31の英語教科書名と定価が掲載されている。
- 30) *Union Reader, Number One*, ed. by Charles W. Sanders. Bookselling Co., [1884], 96p.
- 31) 『国立国会図書館所蔵 明治期刊行図書目録 第四巻 言語・文学の部』国立国会図書館、1974年、245-59頁参照。
- 32) 上記の『国立国会図書館所蔵 明治期刊行図書目録』には、『ナショナル読本』の直訳本は、第一から第五リーダーまでの5巻を合わせると、全部で121種類が掲載されている(同書第四巻、245-59頁参照)。
- 33) 中村正直訳すところの『西国立志編』は、明治4年[1871年]刊行の初版(木平謙一郎版)だけでも数十万冊が発行されたという(日本英学史学会編『英語事始』日本ブリタニカ、1976年、161-2頁参照)。その後も様々な版が世に出回っていったが、例えば明治27年7月初版の博文館版は明治34年2月に10版、43年5月には実に25版を数えている。
- 34) 『ヘイスティングス』直訳本7種のうち6書に関しては、『マイクロフィルム版／国立国会図書館所蔵 明治期翻訳文学書全集 I』(ナダ書房、1987年)に詳細が掲載されている。そこに漏れている1書の書名は、藤井政景訳『直／訳 わーれん、へすちんぐす伝 全』明治23年(1890年)2月 戸田直秀発行。
- 35) 『ラセラス』の直訳本6書に関しては、拙稿「明治時代のサミュエル・ジョンソ

- ン」『人文研紀要』中央大学人文科学研究所、1990年、1-31頁参照。
- 36) 但し、同書は、初版が栗野忠雄訳・発行であったのに対し、5版は青野友三郎の発行に変わっている。発兌元は天章閣。
- 37) 新井の副読本の直訳本としては『具雷武伝積義』の他に、『フレデリック大王論』（25年4月）、『ヘスティングス積義』全2冊（上26年4月、下27年2月）、『スケッチブック積義』全8冊（巻1、26年8月 - 巻8、30年 月）、『刺世史積義』全2冊（上下共、27年2月）などがあり、それぞれ2版3版と版数を重ねていた。なお新井以外にも、大島国千代、松尾豊文など直訳本を専門とする著名な注釈家も少なくなかった。
- 38) 新井『具雷武伝積義 上巻』1頁。
- 39) 新井、前掲書、3頁。
- 40) 明治期に刊行された翻訳文学書目録としては柳田泉著『明治初期翻訳文学の研究』（春秋社、1961年）巻末の「明治初期翻訳文学年表」が詳しいが、同年表は明治22年までで終わっているため、それを補うものとして、同じく柳田泉著『西洋文学の移入』（春秋社、1972年）や『マイクロフィルム版／国立国会図書館所蔵 明治期翻訳文学書全集 I、II、III』全3冊（ナダ書房、1987-91年）などがある。
- 41) ここにあげた3書の詳細は、『スケッチブック』上下2冊、大日本図書、上 明治34年1月刊（42年4月14版）、下 34年9月刊（42年4月11版）、『クリスマスカドル』大日本図書、明治35年4月刊（39年5月5版）、『ヴィカー物語』大日本図書、明治36年7月刊（39年9月5版）。なお浅野の翻訳にはこれ以外にも有名なものとして、戸沢姑射と共訳した『沙翁全集』全10巻がある（大日本図書、明治38年9月-42年11月）。そのうち浅野の分担した訳は、3巻『ヴェニス商人』（39年2月、39年7月4版）、8巻『御意のまゝ』（41年5月）、10巻『十二夜』（42年11月）の3冊であった。
- 42) 内田魯庵（不知庵主人）「『ラセラス伝』の作者」（『国民之友』222号、明治27年〔1894年〕）34頁。
- 43) 内田 前掲論文、34頁。
- 44) ここに引用した同書冒頭の原文を掲げる。"YE who listen with credulity to the whispers of fancy, and pursue with eagerness the phantoms of hope, who expect that age will perform the promises of youth, and that the deficiencies of the present day will be supplied by the morrow,--attend to the history of Rasselas, prince of Abyssinia." (Samuel Johnson, The History of Rasselas Prince of Abissinia, Geoffrey Tillotson ed., Oxford University Press, 1971, p.1.) 訳文は、田村左衛士訳『刺世拉斯伝』（松田駒次郎、田中治兵衛発行、明治23年〔1890年〕4月刊〔同6月再版〕）を使用した（同書1頁）。

- 45) 上田「序詞」(芝野六助訳『王／子 羅世刺斯伝』) 4－5頁。
- 46) 『明治史第七編 文芸史』(『太陽』臨時増刊15卷3号) 61頁。
- 47) 上田「序詞」(前掲書) 4－5頁。